

韓國老年學研究

Korean Journal of Research in Gerontology

2002, Vol. 11, 111-120

痴呆性高齢者グループホームにおける 情報収集の実態と入居適應との関連

赤司千波

九州大學醫學部保健學科看護學專攻

I. はじめに

痴呆對應型共同生活介護(グループホーム, 以後GHと略)は, 生活リハビリテーション中心の個別的なケアを実践することが重要視されるため, 個々の痴呆性高齢者に關する十分な情報収集が必要である. また, 環境の變化に對する精神的ストレスを最小に押さえ, 痴呆性高齢者がGHにスムーズに入居できるようにするためにも入居前・入居時の

A previous version of this paper was presented at the Annual Meeting of the Korean Gerontological Research Society, Kwangju, Korea, October 2002. Correspondence concerning this report should be addressed to Ms. Chinami Akashi (赤司千波), Department of Nursing, School of Health Science, Kyushu University (九州大學醫學部保健學科看護學專攻), 3-1-1 Maidashi, Higashi-ku, Fukuoka 812-8582, Japan. Her e-mail address is "chinami@shs.jyushu-u.ac.kr".

赤司千波

情報収集は重要と考えられる。しかし、GHの情報収集、アセスメント、ケア計画、ケアの手法が未だ確立されていない。また、これまでのGHに関する先行研究に関しても入居初期の情報収集に関する研究報告はみあたらない。そこで、全国のGHにおける情報収集擔當者を対象として郵送法による質問紙調査を行い、痴呆性高齢者に関する入居前・入居時の情報収集の実態及び入居適應と情報収集の実態との関連を検討したので報告する。

II. 用語の操作的定義

情報収集とは、GHの職員(看護職や介護職など)が面接・観察・調査・検査(測定)・添書・かかりつけ醫の意見書などによって必要な情報を入居前・入居時(入居後1週間以内)に収集すること。精神的ストレスとは、GHに入居することによって、新しい環境に対する不安・混亂が生じ、心理的危機状態の行動をとること。ここでは1週間以内に發現したものをさす。入居適應とは、環境の變化に対する精神的ストレスが生じない、あるいは軽減・消失し、安心・安定した入居生活が送れるようになること。

III. 研究方法

調査対象. 調査対象者である情報収集擔當者1名と事例となる痴呆性高齢者1名の選定は、グループホーム長(以後GH長と略)に依頼した。対象施設のGHは、2000年7月14日の時点で痴呆對應型共同生活介護事業の居宅介護サービス事業として指定を受け、登録されている全国590ヶ所の全施設とした。回収数156施設のうち、事例の入居日が条件を満たさない29施設と欠損値が多い4施設を除いた123施設(21%)を分析対象とした。

調査方法. 調査内容は、施設の概要、情報収集擔當者の背景(属性、教育、情報収集に対する意識)、事例の属性と入居適應の状態の3部構成

痴呆性高齢者グループホーム

とした。入居適應の状態は、入居時の精神的ストレスの出現の有無を指標とした。質問紙の配布は、GH長宛に郵送し、回収は、同封した封筒にて返送を依頼した。調査期間は2000年7月31日～9月18日であった。

分析方法及び倫理的配慮。 分析には統計解析ソフトSPSS(Version 10.0)を用いた。入居適應状態と情報収集の実態との関連はFisherの直接確率検定を用い、有意水準は5%とした。調査施設及び調査対象者には研究目的と方法、プライバシー保護について説明すると共に、研究結果は統計的に処理し、個々が特定されないことを明らかにし、研究協力を依頼した。

IV. 研究結果

対象施設の概要。 開設1年未満が87施設(70.7%)、1年以上2年未満が15施設(12.2%)で全体の約5分の4を占めており、比較的GHの運営経験の浅い施設が多かった。職員の資格・職種については(複数回答)、介護福祉士が勤務している施設が101施設(82.1%)、ホームヘルパー93施設(75.6%)、看護師45施設(36.6%)であり、全體的に介護職員が勤務している施設が多かった。

情報収集擔當者の背景。

属性。 調査対象者123人の年齢は19歳～65歳であり、平均年齢は41.0($SD = 11.8$)歳であった。性別は男性37人(30.1%)、女性86人(69.9%)で、約1對2の割合で女性が多かった。GH勤務経験年数は半年未満の者が73人(59.3%)であった。情報収集擔當者で経営者やGH長及び介護主任などの役職にある者が97人(78.9%)であった。資格・職種のある者113人(91.9%)の内訳(複数回答)は、介護福祉士48人、看護師19人、ホームヘルパー18人、准看護師10人、社会福祉主事10人などであり、情報収集を行っていたのはさまざまな資格・職種の人々であった。なお、介護支援専門員の有資格者は42人(34.1%)であった。

赤司千波

情報収集擔當者の教育と情報収集に對する意識. 痴呆介護の研修受講者は89人(72.4%)で全體の約4分の3を占めていた. 情報収集に關する工夫は、職員間の連携を密にとっているが98人、日々の記録を行なうが96人、家族との連携を密にとっているが84人、入居前の居所での様子觀察が61人などであった. 情報収集に關する課題は、職員の教育の必要性があると答えた者が77人、痴呆症の診斷が正確でないと答えた者が67人、添書の内容が不十分であるが48人などであった. 情報収集に關する自由記述では、「家族が痴呆症について知識不足である」「家族が家庭環境、家族關係など話したくない部分が多くあるため情報収集が十分に行なえず、對應が遅れる場合がある」などが記されていた.

事例の入居適應の狀態と情報収集の實態との關連.

屬性. 事例となる痴呆性高齢者123人の平均年齢は81.38歳($SD = 5.8$, $Range = 63 \sim 94$)であった. 性別では男性17人(13.8%), 女性106人(86.2%)で約1對6の割合で女性の入居者が多かった.

入居適應の狀態. 痴呆性高齢者123人のうち、試験通所を経験した者は25人(20.3%)であり、そのうち8人(32.0%)に歸宅要求や不安焦燥などが生じた. また、試験入居を経験した者は17人(13.8%)であり、そのうち7人(41.2%)に試験通所と同様の歸宅要求や不安焦燥などが生じた. さらに、入居時に精神的ストレスが生じた者は69人(56.1%)であり、その内譯は歸宅要求が55人、不安焦燥が37人、睡眠障害が15人、被害妄想が14人、他入居者とのトラブルが12人、失禁が10人、徘徊が3人、食欲不振が3人などであった. 試験通所の際や試験入居の際に精神的ストレスが生じた者は、入居時にも同様に生じていた.

情報収集の實態と入居適應との關連. <表 1>に示すように、開設期間、母體施設の有無との關連性は認められなかった. GH全職員の資格・職種との關連性については、看護婦師が勤務している施設が勤務していない施設より、入居時に精神的ストレスを生じた者が有意に少なかった($p < .05$). また、准看護師が勤務している施設が勤務していない施設より入居時に精神的ストレスを生じた者が少ない傾向にあった.

痴呆性高齢者グループホーム

＜表 1＞ 入居時の精神的ストレスと GH 組織との関連

		精神的ストレス		p値
		なし	あり	
開設期間1)	1年未満	36	51	.420
	1年以上	17	17	
母體施設	なし	20	23	.706
	あり	34	46	
介護福祉士	勤務者なし	10	12	.990
	勤務者あり	44	57	
ホームヘルパー	勤務者なし	12	18	.676
	勤務者あり	42	51	
介護支援専門員2)	勤務者なし	26	38	.466
	勤務者あり	28	30	
看護婦(士)	勤務者なし	28	50	.024
	勤務者あり	26	19	
準看護婦(士)	勤務者なし	45	48	.093
	勤務者あり	9	21	
社会福祉士	勤務者なし	50	62	.754
	勤務者あり	4	7	
無資格者	勤務者なし	42	51	.676
	勤務者あり	12	18	

Note. 1)は回答施設121施設, 2)は122施設, 他は全て123施設

($p < .01$). その他の資格・職種との関連は認められなかった。＜表 2＞に示すように、情報収集担当者との関連についてみると、情報収集担当者が女性職員(86人)の場合が男性職員(37人)の場合より、入居時に精神的ストレスを生じる者が有意に少なかった($p < .01$)。情報収集担当者の資格・職種の有無との関連は認められなかった。介護支援専門員の資格の有無、GH勤務経験年数、痴呆介護の研修受講の有無との関連は認められなかった。

<表 2> 入居時の精神的ストレスと情報収集担当者との関連

		精神的ストレス		p値
		なし	あり	
性別 (n=123)	男性	9	28	.005
	女性	45	41	
資格・職種 (n=123)	なし	5	5	.747
	あり	49	64	
介護支援専門員 (n=113)	勤務者なし	30	41	.845
	勤務者あり	19	23	
GH勤務経験 (n=120)	0～12ヶ月	36	50	.424
	12ヶ月以上	17	17	
痴呆介護の研修 (n=122)	受講なし	12	21	.312
	受講あり	42	47	

V. 考 察

入居前・入居時の情報収集の実態

情報収集担当者. GHの情報収集担当者は、比較的GHのケア経験の浅い者が約6割を占めていたが、経営者やグループホーム長及び介護主任などの役職にある者が高い割合を占めており、GHの運営やケアに關して中心的に關わっている職員が情報収集を行っていたと考えられる。

情報収集を行なう時期. 試験通所や試験入居の際に精神的ストレスが生じた者は、入居時においても精神的ストレスが同様に生じていた。このことは、試験通所や試験入居の際に精神的ストレスを生じる者は、入居時にも生じる確率が高いことを意味する。したがって、試験通所や試験入居での痴呆性高齢者に関する情報収集を行なうことは、入居適應の支援に有効と考えられる。

痴呆性高齢者グループホーム

情報収集源と職員. 痴呆性高齢者の情報収集源として、痴呆性高齢者である本人、家族、さらに本人が利用していた施設などがある。本調査において、情報収集源としての家族に対する課題があげられていた。痴呆性高齢者が安心してGHでの生活を送るためには、本人をよく知る家族や知人からこれまでの生き方、考え方、性格、生活習慣などの情報を収集して分析し、痴呆性高齢者の現状をよく理解することが重要である。また、本人や家族が隠したがる情報にはその後の援助に重要となる要素があることから、家族との信頼関係を築きながら段階的に情報収集を行なっていくことが重要である。GHに勤務する職員に関して、本調査では無資格者の勤務している施設が約4分の3であった。複数回答ではあるが、情報収集担当者の約6割は情報収集に関する課題として職員の教育の必要性を指摘していた。豫備調査においても、「職員の資格・職種がさまざまであり、GHの痴呆性高齢者に関する認識が一定の水準に達していない。」という現状を訴えた施設があった。これらのことから、GHの職員に痴呆性高齢者に関する専門的な内容の研修が必要であることが示唆された。

入居適応と情報収集の実態との関連

情報収集担当者. 情報収集担当者が女性職員の場合が男性職員の場合より、入居時に精神的ストレスを生じる者が有意に少なかった ($p < .01$)。この結果については、対象数の違いによるものなのか、資格・職種が影響しているのか、あるいは他に影響要因があるのかを今後分析していく必要がある。情報収集担当者の資格・職種は多種多様であったが、それらの資格・職種と入居時の精神的ストレスとの関連は認められなかった。高齢者のケアニーズは、疾病・健康状態と生活障害を絡めた形で発生してくるので、入居時に情報収集を行なう職員は、これらの要素を統合した情報収集を行なうことが必要と考えられる。

施設の全職員. GHの全職員の資格・職種の違いとの関連をみると、看護婦師が勤務している施設が勤務していない施設より、入居時に精神的ストレスを生じる者が有意に少なかった ($p < .05$)。また、准看護師

赤司千波

が勤務している場合は少ない傾向にあった ($p < .01$). このことから、GHにおいて看護職の果す役割の重要性が示唆されたものと考えられる。痴呆性高齢者は、自分の思いや要求をうまく表現できず、また体の異常を訴えることができない。したがって、痴呆性高齢者の発するサインを職員が早めに見極めて対処することが必要とされる。日々の身体の変化を観察し、的確なアセスメントに基づいて迅速に対応のできる職員が勤務していることによって、痴呆性高齢者のGHの暮らしがより安心したものになると思われる。痴呆性高齢者の痴呆の重度化に伴い、痴呆症についての専門的な知識と全身的な管理能力がますます必要とされることが予測され、今後看護職の果す役割がさらに期待される。

研究の有用性と限界

本調査結果から得られた知見は、今後のGHの情報収集やケアのあり方を検討する基礎データとして有用と考える。しかし、分析対象が123施設であり、全国590ヶ所全てのGHから得られた調査結果ではない。また、増え続ける施設の實態についても明らかにしていく必要がある。入居適應の状態を明らかにするために入居に伴う精神的ストレスを指標としたが、そのストレスが生じる時期を入居後1週間とし、ストレスの主なものは調査対象者が判断したため、痴呆症状との関連は明らかではない。入居に伴う精神的ストレスが生じる時期と内容についての妥当性は、さらに事例数を増やし検証していきたい。

VI. 結 語

GHにおける痴呆性高齢者の入居前・入居時の情報収集の實態と入居適應との関連を明らかにすることを目的として、情報収集擔當者を対象として郵送法による質問紙調査を行なった結果、得られた知見は以下の通りであった。

1)情報収集擔當者の約6割はGHの勤務経験年数が半年未満であった。資格・職種を有する者が約9割であり、その主なものは介護福祉士、

痴呆性高齢者グループホーム

看護師，ホームヘルパー，准看護師であった。

2) 痴呆性高齢者123人中69人(56.1%)は入居時に精神的ストレスが生じた。

3) 情報収集擔當者が女性職員の場合が男性職員の場合より，入居時に精神的ストレスを生じる者が有意に少なかった ($p < .01$)。

4) 看護師が勤務している施設が勤務していない施設より，入居時に精神的ストレスを生じた者が有意に少なかった ($p < .05$)。

謝辭

本研究にあたり、豫備調査及び本調査にご協力頂きました全国のGHの施設長ならびに職員の皆様に心から感謝いたします。

**Relationship between Caregivers' First Interview with the
Demented Elderly Persons and their Adaptation:
A Survey of Caregivers in the Group Homes in Japan**

Chinami Akashi
Department of Nursing
School of Health Science Kyushu University
Fukuoka, Japan 812-8582

The purpose of this study was to identify the relationship between the first interview with a caregiver for elderly persons with dementia and their adaptation to living in a group home. Data for this study was gathered through a questionnaire survey sent to a sample of 123 people who worked for group homes and took part in interviewing elderly persons with dementia and their families. In those cases where female workers performed the first interview, the percentage of elderly persons with dementia who reported stressful situations during their first week after admission was significantly decreased in comparison to those cases where male workers performed the first interview. The percentage of elderly persons with dementia who reported stressful situations was also significantly lower in the group homes where registered nurses worked for in comparison to the group homes where nursing aids, home helpers, or social workers worked for. The results suggest that the role of nurses is important in helping elderly persons with dementia to cope with the new environment in a group home.

(논문접수일: 2002년 9월 24일)

(수정논문접수일: 2002년 11월 4일)

(논문게재승인일: 2002년 11월 22일)